

A 日 程

〈出典一覧〉

- | | | | |
|----|------|-----------------------------------|--------------------------|
| 国語 | 岩崎吉一 | 『近代日本画の光芒』一部改変 | 京都新聞社 |
| 国語 | 飯塚大展 | 「一休諸国物語」（『一休和尚全集第5巻 一休ばなし』所収）一部改変 | 春秋社 |
| 国語 | 梅谷献二 | 「さらば妖怪たち」（『環境衛生』29巻・6号（1982）を改変） | 公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会HP版 |

問10

本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は④③②①

- ④ 人間の快適さのために住宅の構造や材質を変化させると、スカシチャタテのような虫が絶滅してしまう
- ③ 気密性が低く、暖房器具が発達していない住居であっても、ゴキブリが住み着くことはありうる
- ② チャタテムシの鳴き声は障子を叩く音によるものだが、口ひげや尾端ではなく、脚で叩いていることが明らかになった
- ① チャタテムシの鳴き声は、たまたま茶をたてている音になぞらえられただけで、小豆を洗う音に聞こえる可能性も同様にある
- ④ 日本の家屋から障子が姿を消した結果、それまで人と同居していたスカシチャタテが屋内に住めなくなってしまう

問3 これまでの歴史的な変化とは、質的に異なる異文化による急変とあるが、これは虫にとってどのような変化が起こったことになるのか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 39

- ア 特定の在来種にとって致命的な建築主材の変化が、その融通性を上回る速度で起こった
- イ 虫を受容し、虫とともに形成されてきた歴史と文化が、外来の価値観によって駆逐された
- ウ 構造美より気密性を追求するという質的転換が、人類の生活域に虫を入り込めなくした
- エ 異文化の急速な流入は、同時に外来の虫の急激な流入を促進し、生態系を短期間に改変した
- オ 虫自身の自然な進化の流れとは異なり、人間が作った外的環境によって急速に進化が促された

問4 一部の日本特有の屋内性の昆虫たちは、ついに日本人との同居生活についてこれなくなり始めた。とあるが、住居の気密性を増したことによりスカシチャタテが人間と同居できなくなったのは、この虫がある生態をもっていることによる。その生態を示している部分を十三字で抜き出し、記しなさい。解答番号は 36

- ③ ① 良い(イ)チャタテムシ、良い(ウ)妖怪とあるが、これらの「良い」の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 37
- ア 日本の文化を豊かにする
- イ ささやかな利益をもたらす
- ウ 生活が規則正しい
- エ 人間にとって無害である
- オ 人の目につかない

問6 いわくありげな^⑤の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 38

- ア 人を気味悪からせるような
- イ いかにもふざわしいような
- ウ わからない部分が残りそうな
- エ そのまま表現しようとする
- オ こみいった事情がありそうな

問7 一茶^⑥とあるが、小林一茶の作品の中から一つを選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 39

- ア 笈の小文
- イ 墨汁一滴
- ウ 夜半楽
- エ おらが春
- オ 赤光

問8 この妖怪の存在が確認されたのは、夜ごとにアズキを洗う音によってであった。とあるが、これはどのようななか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 40

- ⑦ ① 姿の発見より先に音が知られ、それをきっかけにその音を出している実体が目撃された
- イ まず音が聞こえ、不審に思ってみると小豆洗いがいた、という昔話が定番である
- ウ 爺さんか婆さんかという姿より、アズキを洗う音が特徴的だったのでこの名がついた
- エ 音から小豆洗いの存在が想像されただけであり、その姿は視認されたことがない
- オ 姿の見えにくい妖怪を見つけるには、音を頼りに居場所を特定する方法が有効だった

問9 今、スカシチャタテと妖怪たちは、全日本的な規模で屋内からその姿を消そうとしている。とあるが、これについて、次の(1)~(2)の問いに答えなさい。

- ① スカシチャタテが屋内から姿を消そうとしているのはなぜか、人間との同居に利点がなくなった事情に触れながら三十文字以内で説明しなさい。解答番号は 41
- ② 妖怪たちも姿を消そうとしているのはなぜか、本文の内容をもとにした理由づけとしてもっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 42

- ア 西洋の合理的な考え方がテレビなどを通して広まった結果、妖怪を信じようという発想がなくなったから
- イ 夜になっても出でころのわかる大きな音が聞こえるようになり、妖怪の存在を思わせる、小さな不気味な音が聞こえなくなったから
- ウ 清潔で明るい現代の住宅では、夜中になっても、人間である家の主人が茶をたてるのが不自然ではなくなったから
- エ 妖怪の正体は虫であるため、人の住む空間から虫を見えないようにできれば、妖怪も追い出せたと認識されるから
- オ 建築様式の変化は西欧化のひとつの現れであり、異文化の多方面にわたる流入は、妖怪についても西欧化を促したから

い。ぼくはこのような言い方は好まないが、分かりますか？

「アズキを洗う音」というのは、アズキを洗う音のことである。

「アズキを洗う音」というのは、アズキを洗う音のことである。

「アズキを洗う音」というのは、アズキを洗う音のことである。

「アズキを洗う音」というのは、アズキを洗う音のことである。

悩んだらしい。

(中略)

ぼくは子供のころ東京の杉並で育った。そして夏になると、家の障子に止まるスカシチャタテの姿をよく見かけ、その鳴く声を聞いた記憶もかすかにある。

もともとスカシチャタテは、その食物であるカビとの関係から、風通しの悪い古い家に多かった。

鉄筋住宅でも、自分で障子を張り替える必要のない金持ちの豪邸では、まだ障子が多用されている。

障子をきくと開けてみるという。多分その家の主人が茶をたてているはずである。

今、スカシチャタテは妖怪たちは、全日本的な規模で屋内からその姿を消そうとしている。

注
*チャタテムシ類……シラミに近い微小昆虫。屋内性のチャタテムシの多くは体長1mm程度で、人間が保存している食品を食べるものが多い。

*かくれ座頭……本文の中略の箇所而言及されていた妖怪。夜中に物音を立てたり、子供をさらったりすると信じられていた。

問1

32 惜別

33 酌み

問2

彼らの歴史の中では、ずいぶん短い間に起こった。とはどのようなことか、その説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 34

- ア 虫は人間に比べると短命であり、虫一匹が誕生してから人間とかかわるまでの時間というのは極めて短い。人間が新しく住居をつくり、そこで生活を始めてから、最初いなかったはずの虫に室内で出会うまでに時間はかからない。
イ 人類誕生以前から虫は長いこと存在している。人が住居を作るようになってからの変化は虫の歴史では最近のことにあたる。
ウ 虫の研究は自然の中での生態が中心であり、屋内へ居を移したプロセスについての研究は近年になって盛んになった。
オ 幼虫から成虫へと変化する一生を送る虫にとっては、我々が目にする成虫の期間というのはごくわずかである。

問1 更にそのしるし^①を、「そのしるし」の内容を明らかにして、現代語訳しなさい。解答番号は 18

問2 臨終の「大事をも聞かせ給ひて」とは、具体的にどのようなことを行うものと考えられていたか、そのことの詳細が示されている箇所を本文中から十五字以上二十字以内で抜き出し、はじめとおわりの四字を記しなさい。解答番号は 19

問3 ③ ⑦ の説明として、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ③—20 ⑦—21

- ア ラ行四段動詞の一部
- イ ラ行四段動詞の一部十完了の助動詞
- ウ ラ行下二段動詞の一部
- エ ラ行下二段動詞の一部十完了の助動詞
- オ 尊敬の助動詞
- カ 受身の助動詞
- キ 可能の助動詞

問4 「興^④」の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 22

ア 面白みのある

イ ありがたい

ウ この上ない

エ とんでもない

オ ことかしい

問5 御伴とあるが、どのような伴をすることが、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 23

ア 老中の所への伴

イ 冥土への伴

ウ 病床での伴

エ 葬送時の伴

オ 出家の伴

問6 ⑥ ②4 理問こえたる歌の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 24

ア ものの道理が理解できる歌

イ これから起こることを示す歌

ウ 人としてのあり方を知らせる歌

エ 仏道への志を大いに高める歌

オ その意味が世に広く伝えられた歌

問7 空欄 X にはいる語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 25

ア 便り

イ わざはひ

ウ 嘆き

エ 報ひ

オ 恩

問8 本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 26~30

- 26 榊原家の人々は、一休が有名な僧侶であることを以前から知っていた
- 27 病床の兵内に対する一休の教えは、念仏や題目を唱えることを勧めるものだった
- 28 一休を仏として崇めたのは、臨終を迎える人々に対して、悟りの道に導いたからである
- 29 榊原家の近所に立てられた狂歌の高札は、誰もが一休がしたことと思い当たった
- 30 一休は、榊原家の若者が兵内の恩に報いようと死に向かうのを狂歌で思い止まらせた

問9 「一休諸国物語」は、江戸時代の作品であるが、同じ時代の作品ではないものを、次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 31

- ア 玉勝間
- イ 雨月物語
- ウ 菟玖波集
- エ 東海道中膝栗毛
- オ 国性爺合戦

第三問 選択問題 現代文 I

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語については、注を参照しなさい。

ほくはかねてから、屋内に住む虫たちの、野外から屋内へと居を移したプロセスについて少なからぬ興味を持つてきた。そして、このような適応が彼らの歴史の中ではずいぶん短い間に起こったことの普遍性に驚嘆している。ただ、ゴキブリ類で代表されるように、これらの小さい同居者たちの多くは、家主であるヒトからは決して歓迎されていない。たとえ何の悪さもない種類であっても、それが昆虫であるというだけの理由で排斥されてきた。これまでにどれだけ多くの屋内性の昆虫たちが、スリッパで叩かれ、殺虫剤のしぶきを浴びて落命していったことであろうか。

一方、ヒトの住居はひたすらに快適さを求めてその構造や材質が変化してきた。その結果、日本家庭の場合も、木と紙を主材にした独自の建築様式を現出させ、それはまた、耐久性と構造美において世界に誇る存在でもあった。ところが、近代のビルや団地の急増が普及は、これまでの歴史的な変化とは、質的に異なる異文化による急変であった。ここにおいて、一部の日本特有の屋内性の昆虫たちは、ついに日本人との同居生活についてこれらなくなり始めた。その反面、気密性と暖房機器の発達でゴキブリ類のますますの繁栄を約束し、浄化槽の完備がチカイエカやチョウバエ類などの新たな同居者を生み出している。

去る者は悲しい。ほくはいささかの惻然の情を込めて、野に帰った小さいある同居者のことを、墓碑銘に代えて紹介しておきたいと思う。

(中略)

屋内で見られるチャタテムシ類の中であって、スカンチャタテという種類は例外的な存在である。まず、体長が約3mmと格別に大きく、透明でリツパな翅を持つている。さらにその食物も、木や竹などの建材に生じるカビ類で、食品などを加害することはな

(一) 次の問いに答えなさい。

問1 次の傍線部に相当する漢字を含むものを、それぞれ各群のア～エの中から一つずつ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は13～15

13 ジンジョウな手段では解決できない

- ア ジントウ指揮をとる
- イ 警察官が職務上のシンモンをする
- ウ シンギにはずれる行動をとる
- エ ジンチの及ぶところではない

14 多様な情報がサクソウする

- ア 労働力をサクシユする
- イ 有効なタイサクを打ち出す
- ウ 本のサクインを作る
- エ 時代サクゴにならない

15 政治判断をユダねる

- ア 政権をイジする
- イ イジンの伝記を出版する
- ウ 選挙管理インを選出する
- エ ヨウイには動かない

問2

次の空欄 X、Y にはいるものを、それぞれア～オの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は X 16、Y 17

16 彼の返答は目から X へ抜けるようだ。

- ア 口
- イ 鱗
- ウ 鼻
- エ 耳
- オ 額

17 「生流転」の類義語は Y である。

- ア 氣宇壮大
- イ 有為転変
- ウ 栄枯盛衰
- エ 变幻自在
- オ 広大無辺

第二問【漢検問題 古文】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語句については、注を参照しなさい。

西国の讃州に、榊原兵内と申す武士あり、久々相煩ひ、^①醫術を尽くすといへども、^②更にそのしるしなし。殊に重病なれば、最期近づきぬ。折簡、一休、郷内にまします由、その隠れなく、内々殊勝なりし坊主の由聞き及ばれ、急ぎ使ひを以て、「このたび、臨終の大事をも聞かせ給ひて、直なる道に引き入れ給はばありがたかるべし」と申し遣はす。一休聞こし召し、それこそ、いとやすき御事なり」とて、そのまま、使ひと連れて参らる。

(中略)

家内の人々も、日頃、聞き及びし憎なれば、何さま、成仏、安心、至極の旨を聞くべきと、我も我もと次の間に詰めかけ、頭を傾け、耳を澄まして聞く所に、一休、何となく、病人の耳に口を当て、大音にていはく、

「汝すでに末期なり。我も行く、人も行く、ただ是一生は夢の如く、幻の如し。」

かく言ひ捨て、帰る給ふ。いづれも勝手には、一門家の子集まり、「さてもさても、珍らしからぬ、一休坊主の勤めかな。それ臨終を勤むると言ふ事は、成仏観心と言ひ聞かせて、心安く終はらすをこそは、臨終大事を勤むると言ふものなるに、かかる語は、坊主の言ふまでもなく、皆、眼前に、人毎に言ふ事なり。さて、^④一興の坊主かな」と、口々に申しあへり。

かかる所へ、ある出家来たり、この由を聞き、「いやいや、それはいづれも不都合なり、一休ほどこそ候。かやうの語こそ、いかにも殊勝におぼえ候や、惣じて禪家道の坊主などと言ふ者は、余宗などのやうに、あるひは念仏、題目を唱へて、^⑤尊び所へおまいりやれ、ありがたき事をお忘れやるなどと言ふ事は、禪僧などは申さぬなり。いかにもいかにもおの勤め殊勝なり」と申しければ、いづれも、「さもこそありぬべし」と皆一同に感しける。

さて、御内に、恩を深く蒙りたる者ども、御最後の御件^⑥をただ今なりと、我も我もとひしめきける。この由、一休聞き給ひて、その夜の夜半に、かの侍の近所に、一首の狂歌を立てられけり。

世の中の生死の道につれはなし、たださびしくも独死独来

かやうに言ひて、立てらるるを、御内の者、やがて礼を奪ひ取りて、老中に奉る。いづれも打ち寄り、「是は、いかなる者の立てつらん」と詮議しけるに、かの僧、また申さるるは、「さだめて是は、修行一休の立てつらん。かやうの事を言ふべきものは、当所にはかつておほえず。さてさて理聞こえたる歌かな。この歌の心は、^⑦皆人は独り死して、独り来る身なれば、誰あつて冥土の件をすればとて、冥土の X とならんや。たとひ一度に五十、百御伴するといへども、自業自得過なれば、面々の罪障により、百人が百所へ往くべし。かくある時は、あたら若き人々の、世継の御用にたたざれば、冥土の伴ともならずして、無益の死をする時は、詮無き人を救さむ事、ただ曲けて、この御伴の沙汰は差し置かるべし」と、理を尽くして申されければ、皆この理に同じつて、重ねて御伴の沙汰は無かりけり。

すでに、早、死ぬべきに定まりし者どもの、一休の御勤め故に、皆死の難を逃るるなり。さてこそ、和尙をば、いかなる遠国・遠里までも仏と言はぬ人は無し。

(一) 休諸国物語一による

注

*禪家悟道……………禪宗で悟りを開くこと。

*題目……………南無妙法蓮華経のこと。

*尊び所……………極楽浄土。

問5 旅は遍歴の象徴であると同時に、「孤独な魂の象徴」とあるが、「孤独な魂」がなぜ旅になぞらえられるのか、その説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑤

- ア 自然と親密な関係になることを求める心境に誘われるから
- イ 主体的な自己を離れ純粋な心と眼で新たに物事をとらえるから
- ウ 孤独に身を置くことで湧き上がる思い出を体験することから
- エ 大宇宙に遍在する大きな力の存在を感得することから
- オ 古来多くの芸術家が求め実践し普遍化された考え方だから

問6 外化された私たちの自我とあるが、本文中の波線AとEと「外化された自我」に関する説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑥

- ア すべて「外化された自我」にまつわる心的事象である
- イ AとEのみ「外化された自我」による感覚である
- ウ BとEのみ「外化された自我」により到達する心境である
- エ AとCとDは「外化された自我」が志向するものである
- オ BとCとEは「外化された自我」の必要とする有り様である

問7 自然の変化の中にあられる生のかかしとあるが、「生のかかし」とはどのように示されるのか、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑦

- ア 人間を超えた大きな力の優しさに包まれているのを感じる
- イ 人間と自然とが親密な関係を成立させているのに気づく
- ウ 自我の分身が遍在者と合して超越者となっているのを味わう
- エ 主体的な自己と外化された自己との対話が聞こえる
- オ 大自然の大きな力に包み込まれ新たな暗示を与えられる

問8 帰属性をよりどころとする旅はなぜ「真の旅」とはなり得ないのか、それを説明した次の文章の空欄にあてはまる語句として、もっとも適切なものを、あとの語群X、Y、Zの中から選び、その記号をそれぞれマークしなさい。ただし、一つの記号は一度しか使わないこととする。解答番号は⑧

旅にXを求めるとしても、戻るところがある限り、究極のXにはなり得ず、Yを持ちにくい。そのため自然を通して人間を超えた大きな力を感得し、その力と合一した結果、Zを与えられる機会をえられないからである。

- 説明文
- Xの語群
 - ア 外化
 - イ 孤独
 - ウ 情感
 - エ 対話
 - オ 変化
 - Y・Zの語群
 - カ 新しい生命
 - キ 純粋な眼と心
 - ク 心のやすらぎ
 - ケ 神秘的な体験
 - コ 切実な祈りの気持

問9 空欄Bにはいる接続詞として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑩

- ア すなわち
- イ 同じように
- ウ しかし
- エ ともすれば
- オ さらに

問10 芭蕉の作を次のAとEの中から二つ選び、その組み合わせとともっとも適切なものを後の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は⑫

- ア AとB
- イ BとC
- ウ CとD
- エ DとE
- オ AとC

A 荒海や佐渡に横たふ天の河
 B あらたふと青葉若葉の日の光
 C 春の海ひねもすのたりのたりのかな
 D 菜の花や月は東に日は西に
 E 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

第一問 共通問題 現代文

(一) 次の文章は「旅することを愛し、旅を人生とも、芸術とも感じて」いた画家、東山魁夷について書かれたものの一節である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語については、注を参照しなさい。

自分は今と心底いると彼は感じていた。敗戦前後の混乱と窮乏は日本人のほとんど全員が経験したものであり、それ

で [A] することはなかったが、相次ぐ肉親の死と、再起を期して日展に出品した作品があえなく落選したことは、彼を決定的にのめしたものである。生きていくことは、むなしではないかと考えた。

そんな気持ちでいた翌年二十一年冬、東山魁夷は写生のため千葉県の房総半島にある鹿野山に登った。九十九谷を見渡す山頂に立つと、折から夕暮れに近い澄んだ大気の中で、山並みは壁のように幾重にも重なり、はるか遠くへつづいていた。人影の無い草原に腰をおろして刻々と変わっていく緑の光と影の微妙な諧調を眺めていると、彼の胸の中にはいろいろな思いが湧き上がってきた。

だがどうしたことが、しばらくこの風景と向かい合っているうちに、自分の心の痛みや空白感が少しづつやわらき、何か充たされていくような気がした。この風景と同じように、自分も大自然になぎまぎに包み込まれ、新しい生命を与えられるように感じたのである。のちに彼はこう書いている。「足もとの冬の草、私の背後にある葉の落ちた樹木、私の前に、はてしなくひろがる山と谷の重なり、この私を包む、天地のすべての存在は、この瞬間、私と同じ運命に在る。静かにお互いの存在を肯定し合いつつ無常の中に生きていく。蕭条とした風景、寂寥とした自己、しかし、私はようやく充実したものを心に深く感じ得た。」

それは [B] 悲哀を経た後に見出した、心のやすらぎであつたらう。またこういう意味のことも言っている。それから鹿野山の神野寺で数日を過ごすうち、九十九谷の風景の上いまままで自分が歩き回っていた甲信や上越の山々の情景が重なり合い、雄大な構想となって展開されてくるのを感じた。中央のいちばん向こうに八ヶ岳か妙高を遠望するような山嶽を置き、そこに夕陽の最後の残照を明るく与えることよって、凛然としていた構図をひき締めることができた。光の明暗と、大気の遠近による諧調、嶺々の稜線が作り出す律動的な重なり合いがこの作品《残照》を構成する要素であるが、それによって表そうと願ったものは、当時の自分の心の反映、切実な祈りの気持、そして素直の極点での自然と自己との緊密な充足感ともいべきものであつた。

東山魁夷は「素直の極点」つまり総てを失ったと感じたとき、初めて清澄な眼と純粹な心で自然に向かい、自然と自己との深い一体感を体験した。天地のあらゆる存在は大きな力に抱かれて、この瞬間自分と同じ運命にあることを実感する。この大宇宙に遍在する人間を超えた大きな力の存在を感じるのである。

東山魁夷の精神の内部には、人間は本質的に孤独な存在であるという意識が潜んでいるように思われる。当然、芸術も孤独な魂から生まれ出されるものである。彼はそれを「画家である」ということは、人間以外のものであることを必要とする峻烈なものであり、暗示的な言葉で述べているのだが、その孤独な魂が自然を通して人間を超えた大きな力を深く感じ取り、大きな力の優しさに包み込まれたとき、人間と自然の親密な関係が成立する。そうした関係を画家の立場から言葉で言えば、風景画家として自然に対して清らかに澄んだ眼、ひいては心を持つということなのである。したがって東山魁夷の芸術は孤独な存在としての自分自身を見つめることから出発しているが、彼にとって旅も孤独への願望と無関係ではない。冒頭でも述べたように、彼は旅することを愛し、旅を人生も芸術とも感じている。その場合旅は遍歴の象徴であると同時に、孤独な魂の象徴としても意識されているのである。

旅は、家族や世間など日常生活におけるさまざまな絆を断ち切る、つまり日常性をはらい落とすひとつの有効な手立てとなる。精神病理学者島崎敏氏はその著書『孤独の世界』(昭和四五年 中央公論社)で、孤独を求め人間は旅することを願ひ、自然界へ入りたがる傾向が強いと指摘し、自然界へ一人で入ると生命のみならず生命の中での自分が復活できたと感じられるが、それは孤独になることよって外化された私たちの自我が包括的自然界という形をとって普遍化されるためだ、したがって中

心にしたつ自分から眺め感じられる周りの世界の見え方は、そのときどきの自分の気分のあり方に相応じていろいろに変化するはずである。そしてひとつの例として、深い山で夜ふけにテントを抜け出して星をちりばめられた天の円蓋を人で見上げていた時のような場合を挙げ、「天穹の真下にひとりきり立っている自分が万有によつてつつまれ、遍在者のなかへ同化する神秘的体験となりやすい。つまり自分から分かれ外化してた自我の分身は、天穹と合一して(天なる超越者)となり、星のまたたきは、自分にむかつて暗示をおくる信号となる」とも言っている。孤独は自然を媒体として、主体的な自己と外化された自己との対話を生むものである。東山魁夷の『風景との対話』(昭和五三年 新潮社)の一節、いまままで、なんと多くの旅をして来たことだろう。そして、これからも、ずっと続けることだろう。旅とは私にとって何を意味するのか。自然の中に孤独な自分を置くことよって、解放され、純化され、活発になつた精神で、自然の変化の中にあられる生(いのち)を見た、ということのか、という部分は、まさしく孤独——旅——自然——主体的自己——外化された自己について語っているのである。

だが帰属性をよりどころとする旅は、真の旅となり得るだろうか。先に旅は日常性をはらい落とすひとつの有効な手立てであり、孤独を求める人間は旅することを願ひたが、旅は一方で、ふだん意識していなかった自分の土地(場)や家族への帰属性を再確認させる結果を生む。したがって帰属すべきところのある旅は旅行者の旅であり、ある意味で感傷的な旅である。旅は帰属すべきところが無いと感じたとき切つて真の旅となり、彼自身の純粹な眼と心で自然と対話することができるようになったのである。彼の芸術の基底に流れる清冽な情感とは、この孤独な魂が生む美の發現に他ならない。

(岩崎吉二「近代日本画の光芒」)

注 *日展………日本美術展覧会の略称。日本画、洋画、彫刻、工芸芸術 書の五部門がある。

問1 漂泊の対義語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は [1]

- A 永住 B 在住 C 定住 D 定着 E 土着

問2 空欄 [A] にあてはまる語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は [2]

- A 意気消沈 B 孤軍奮闘 C 周章狼狽 D 遲疑逡巡 E 付和雷同

問3 孤独と悲哀を経た後とあるが、この時点で至つた心境を表す別の表現を本文中から五字で抜き出し、記しなさい。解答番号は [3]

問4 自然と自己との関係について、自己との緊密な充足感、自分と同じ運命にあることを実感と言っているのは、その関係をどのように感じているからか、本文中の語を用いて、「感じているから」につながる形で三十文字以内で記しなさい。解答番号は [4]